



日本の昔話

28

武蔵の昔話

■池上真理子編

日本の昔話

28

# 武蔵の昔話

■稲田浩二監修

■池上真理子編

監修者

稲田 浩二

1925年岡山市生まれ。広島文理科大学を卒業し、現在、京都女子大学文学部教授。

主著・主論文に『昔話は生きている』『説話文学必携』（共著）「日本霊異記話型の一考察」「今昔物語集の説話性に関する試論」などがある。

編者

池上 真理子

東京都練馬区生まれ。1972年東洋大学文学部国文学科を卒業し、現在、埼玉県所沢市立並木小学校教諭。

編著『越後黒姫の昔話』（三弥井書店）

日本の昔話28

〈検印廃止〉

武蔵の昔話

定価 1800 円

昭和54年9月20日 第1刷発行

監修者 稲田 浩二

編者 池上 真理子

発行者 藤根 井和夫

印刷 凸版印刷

製本 石津製本

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号150 振替 東京1-49701

©1979 Koji Inada  
Mariko Ikegami  
0339-015028-6023

落丁・乱丁本はお取替いたします

## いのち長きものへの畏敬

稲田 浩二

遠いわれらの祖先から口づたえに伝えられてきた日本昔話の現状は、たとえていえば、目に見えない地下水のようなものです。それは、あわただしい情報と速度に飲みこまれた人々にとっては多分ふだんの生活には無縁であり、ときおりふとなつかしむ過ぎ去った日々、ふるさとのようなものでありましょう。けれども、その地下水は、いまもつつましく生きている、心ある人々がその気になつてたずねるならば、やさしくことばをかけ、耳を傾けるならば、意外にみずみずしいことば——昔語りが地上にわき出るものなのです。わたしどもは、ここに一九七〇年代の一つの証言として、日本の各地にわたるこの種の実験をありのままにみなさまにご報告いたしたいと思います。

昭和の初年、柳田国男が昔話を学問の対象とした当時、すでに昔話は生活の表面から姿をかくしかけていたようです。柳田国男はこれを愛惜し、一日も早い調査をと人々に訴えています。それから半世紀たったいま、昔話はいつそう地表から深くもぐり、代ってブラウン管や活字の「民話」が

人々の目をうばっております。それにいちいち目くじらをたてるというのではありません。新しい皮袋に盛られて、「民話」はどこへ向けていくのか、多少の不安をもちながらも見守ってゆきたい、とわたしなどは思っております。ただ、これまでこれほど一律に昔話が扱われたことはなかったので、昔話の世界も年とともに従来なかった変化を蒙るのではないかと思います。いや多分それはもうある程度まで進行しているにちがいません。東北に伝承してきたはずの昔話が、ブラウン管や活字をへて、こつ然として山陽地方に現われてくるということです。したがって、昔話が村や町、家々に伝わるという土着的・風土的な本質は、よほど注意深く扱わないと裏切られることになります。

「日本の昔話」はこの意味でかたくなに、村々家々に口づたえされてきた昔話に限って収めることにしました。編集にたずさわる皆さんはいちいち語り手のところにおもむいて、一つ一つの話を聞き出し、録音テープに収め、これをそのまま文字に移すことにしました。それはぶこつだけれど、ありのままの口づたえの姿を最もよくとどめるものだと思うからです。したがってこれは、読者のかたにそれほど口ざわりがよくない食べものかもしれない。土から掘り出したままの、いわば料理の素材だからです。ただそれをじっくり噛みしめていただけるなら、現代日本のつましい素顔の一つに出会えるはずです。テレビや書物でなめされない、日本人の飾らないものの見方、表現、よろこびとなげき……総じて日本人の人生のありのままがこめられています。

どうしたわけか、これらのことばは、同じ棟の下に住んでいる家族でさえも耳にすることがほとんどないものです。語り手ご自身も多くの人が何十年ぶりに語ったという種類のものです。したがって、大部分の話がたまたまよい聞き手の編集者に出会って、水を得た魚のようにふき出して世に出たものです。いまわたしどもは、これを命長きものへのいとおしみと畏敬の念をもって世にくりたいと思います。これがよい読者をえて、新しい明日をうんでいくかとなれば、語り手とわたしどもの望外の幸せであります。

一九七七年四月



## はしがき

本書は『武蔵の昔話』となっていますが、調査範囲を埼玉県内にしぼったことを、まずはじめにおことわりしておきます。

埼玉県における昔話集は昭和一二年の『川越地方昔話集』（鈴木棠三編・民間伝承の会）と前記の本を同編者が再編成した『武蔵川越昔話集』（昭和五〇年・岩崎美術社）があるのみで、現在どの程度の昔話が伝承されているのやら見当もつかず、ただ首都圏だからあまり残っていないだろうという予想のもとに調査を始めました。第一回目の調査は昭和四十九年八月。勤めの合間をぬってのことです、それから今日まで足かけ六年もかかってしまいました。

本書では、県内を西から東に大きく三地区（秩父地方・丘陵部・平野部）に分けてまとめてみました。調査をしてみると、予想どおり、秩父地方の伝承度が最も高く、平野部はそれに比べると調査が困難でしたが、全体的にみると、思っていた以上の昔話を採話することができました。ただ丘陵部の調査が他地区に比べ手薄になってしまったので、今後の課題としてく思っています。

ここに、まがりなりにも一冊の本としてまとめることができましたのは、調査地でお会いした語り手の皆様はもちろん、数多くの方々のご好意、ご協力があったことです。特に両神村調査の折

りの守谷カツ氏、皆野町調査での和田美代子氏とご実家の皆様、毛呂山・越生町調査の際の、当時の毛呂山町史編纂委員小川喜内氏、毛呂山町議会議員市川六郎氏、毛呂山町教育委員会教育次長秋馬博氏、小山真佐恵氏、川端晴美氏、熊谷市周辺調査の森田晴子氏、所沢市立若松小学校郷土クラブの子どもたち（昭和五二年度部員）とおたずねした市川源一氏には、心からお礼申し上げます。なお、秩父郡両神村地区は、中岡之子さん、長谷川斉君、小船谷季之君、村山勝君、佐々木富井さん、棚橋栄子さんに、秩父郡小鹿野町・戸田市地区は中岡之子さん（ともに東洋大学民俗研究会の後輩）に調査を協力してもらいました。

また、戸田市史編纂室昭和五二年度民俗調査に参加させていただき、その折りの資料を加えさせていただきました。さらに東洋大学卒業生中岡之子さんがまとめられた秩父郡小鹿野町・両神村の昔話の資料の一部も、ご好意によって使わせていただきました。

そして、これまでご指導、ご助言をいただいた稲田浩二先生、大島建彦先生に心よりお礼を述べたく存じます。また、お世話になった日本放送出版協会、担当された入部皓次郎、長岡信孝両氏に厚くお礼申し上げます。なお、本書の挿し絵を父に担当してもらえたことは編者として大きな喜びでございます。

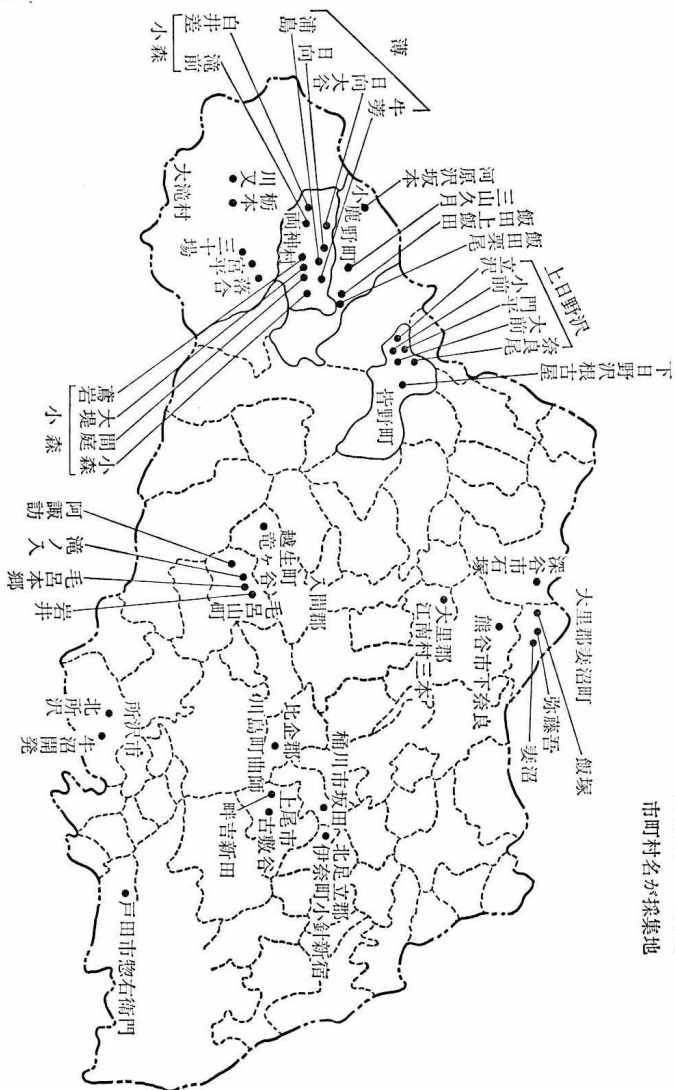
昭和五十四年八月八日

池上 真理子

## 凡 例

- (1) 本書の昔話は、語り手が方言のまま語ったものを、できるだけ忠実に録音テープから翻字したものである。
- (2) 本文の題は、語り手が題名をはっきりと言ったものを除き、編者がつけたものである。
- (3) それぞれの昔話の後に『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送協会編、日本放送出版協会刊）の話型を示している。また、名彙になくて『日本昔話集成』（関敬吾編、角川書店刊）にあるときは、その話型を示している。
- (4) それぞれの本文の後に、その語り手の現住所と氏名を記した。

武蔵の略図  
市町村名が採集地



# 目次

いのち長きものへの畏敬……………1

はしがき……………5

凡例……………7

地図……………8

## 昔話

### 秩父

桃太郎……………24

一寸法師……………27

蛙智……………29

ものぐさ太郎……………30

世の中で一番大事なもの……………32

かごで水かえ……………35

七夕の話……………36

|             |    |
|-------------|----|
| 鶴の恩返し       | 37 |
| 蛙の嫁         | 38 |
| 蛇智入 (一)     | 39 |
| 蛇智入 (二)     | 41 |
| 狸智          | 42 |
| 蟹の恩返し       | 43 |
| かっぱ智        | 47 |
| 栗と稗の拾い分け    | 48 |
| 継子の栗拾い      | 50 |
| 三人兄弟と宝物     | 51 |
| 行くぞー行くぞー    | 52 |
| 天福地福        | 54 |
| 出雲の神さまの娘    | 55 |
| 年取りの晩のあんまさん | 57 |
| 節分の客        | 60 |
| 笠地藏         | 61 |
| 浦島太郎        | 62 |

|                |     |
|----------------|-----|
| ひひ退治           | 64  |
| 鬼婆の話           | 66  |
| 小僧の花とり         | 68  |
| そばの茎はなぜ赤い      | 69  |
| 食わず女房 (一)      | 70  |
| 食わず女房 (二)      | 73  |
| 猫の恩返し          | 76  |
| 猫の仇討ち          | 77  |
| 花咲爺            | 79  |
| かんべえさん         | 82  |
| 鬼のくれた箱         | 85  |
| 何が恐い           | 90  |
| うば捨て山          | 94  |
| もとなりびょうたん      | 96  |
| 山女はかみそり        | 98  |
| 和尚さんおかわり       | 99  |
| 和尚と小僧の豆つかみ (一) | 100 |
| (二)            |     |

|              |     |
|--------------|-----|
| 和尚のてんしき      | 101 |
| 釜盗人          | 104 |
| かみそりに蜂の命     | 105 |
| 十五の年の大蛇の命    | 107 |
| 赤ん坊との縁       | 109 |
| 死んだ子の生まれかわり  | 110 |
| 娘の行燈         | 111 |
| 馬のくそまんじゅう    | 113 |
| ごまの灰         | 116 |
| むじな退治        | 118 |
| 猫がのりうつった嫁    | 120 |
| 狐に化かされた話     | 121 |
| 茗荷を食べると馬鹿になる | 122 |
| 白蛇の話         | 122 |
| 屁ひり嫁         | 124 |
| 姑の屁          | 126 |
| 長い名の子ども      | 127 |

|                              |     |
|------------------------------|-----|
| ねずみの嫁入り……………                 | 129 |
| かめのしりとよく燃えるもの……………           | 131 |
| おかぎさまにふんどし……………              | 132 |
| 隣へお歳暮……………                   | 135 |
| 子どもにおっかない顔……………              | 136 |
| 茶の木の下で蜂さされ……………              | 137 |
| 馬鹿智とひよどり……………                | 138 |
| 茶碗のふた……………                   | 139 |
| 太いところは臼、細いところは杵……………         | 139 |
| よくはれました、つれました……………           | 141 |
| 馬の尻にかけ軸……………                 | 142 |
| 八月二十四日味噌たきによし……………           | 143 |
| ひも合図……………                    | 144 |
| ドッコイシヨ……………                  | 145 |
| 猫のように……………                   | 147 |
| べらぼうめ、ろくでなしめ……………            | 148 |
| 首まきぞうめん投げまんじゅう、ぱっさりびょうぶ…………… | 149 |

|                 |     |
|-----------------|-----|
| 飛び込み蚊帳          | 150 |
| 茶の実             | 151 |
| 芋ころがし           | 152 |
| 落花生の種           | 153 |
| 薬屋とうどん          | 154 |
| 医者とおがみ屋と手品師     | 154 |
| 茗荷の話            | 156 |
| 朝茶をのむ           | 157 |
| 門平の青蛙と立沢の青蛙     | 158 |
| お婆さんくさかろう       | 159 |
| けやき金二円          | 160 |
| ホーホーフロシキダイコン    | 161 |
| 畑の石             | 162 |
| 夏の火は薬           | 163 |
| 嫁と姑（一反風呂敷の着物）   | 164 |
| 嫁と姑（羽織）         | 165 |
| 嫁と姑（穴だらけになった反物） | 166 |